

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392300085		
法人名	株式会社 いわしや窪田		
事業所名	グループホーム みずほ		
所在地	熊本県下益城郡美里町安部235-1		
自己評価作成日	平成26年2月14日	評価結果市町村受理日	平成26年4月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成26年2月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員の離職が少なく、利用者や家族の安心感につながっていると思う。また、通信「みずほ」を通じて家族と職員のコミュニケーションが取れているので、それぞれの家族の思いを全職員で共有できている。今年度より法人の変更により利用者や家族、そして職員も不安を抱えてのスタートであったが、これまで培ってきたチーム力を継続して、今までと変わらない質の高いケアを提供していきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームはこの一年母体変更に伴う体制の見直しに奮闘しながらも入居者への変わらぬ支援で家族の信頼に応え、地域への啓発に努力している。今回の体制移行には行政の助言や指導が大きな力となり、役所に配属される新人職員の研修受け入れに貢献するなど互いに連携し、町の福祉事業の発展や人材育成に共同して取り組んでいる。毎月発行される『通信みずほ』は、ホームと家族を繋ぐ重要な情報源として遠方に住む関係者にも心待ちな便利となっている。「今月の〇〇さん」で、一人一人の入居者の状況をリアルに報告し、紙面で推進会議の内容や参加依頼も同時に発信している。推進会議にはホーム協力者によるミニ講話などの時間が設けられるなど、リビングを会場としてアットホームな雰囲気が進められ家族参加者が多い事も『みずほ』の特徴である。今後も変わらぬ温かな支援により、笑顔の日々が展開されていくことに大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の振り返りの機会がなく、職員間での温度差が感じられる。理念について全職員での協議の場が必要。	管理者はこの一年を振り返り、母体の変更に伴う体制の変化に向き合いながら、書類手続きなどの対外的な対応や、ホーム内の結束を図ることに集中した年だったと語っている。理念についてゆっくり検討する時間はなかったが、入居者や家族にこれまでの支援を継続することで安心して過ごせる環境を提供した。	慌しい一年であったことが推察されるが、その中にも長年に渡る入居者と職員の信頼関係は確固たるものとなって、日々のケアに反映されている。新年度を迎えるにあたり、改めて理念の原点に立ち返る機会を設定し、職員が同じ方向性を持って支援にあたることを期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地区老人会へボランティアの呼びかけを行い協同でホームの畑作りをしたり、施設イベント、コンサート等に近隣の方にも参加してもらうことで交流の機会を作っている。	体制の変更はホーム主催のコンサートに招待した地域の人々にも紹介し、理解と協力を呼びかけている。老人会の支援による畑作りに入居者も出来ることで参加して地域の人々と交流を図り、地元の野菜市場での食材購入も入居者の楽しみである。地域行事のグラウンドゴルフに「みずほ賞」を提供するなど新たな取り組みも展開している。	毎年、続いていた公民館の花植えが今年度は中断したようであるが、人々との交流の場としては是非再会を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キャラバンメイトとして認知症の啓発に努め、社協主宰の認知症総合施策総合推進会議等にも参加し他の事業所や職種との連携を図っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	全家族へ呼びかけ参加してもらうようになっている。その時々でのテーマでの活発な意見交換が行われ、専門的、あるいは経験に基づいたアドバイスを受けながらより良いサービスにつながるよう努めている。	会議には行政や地域の代表、家族の参加があるが、ホーム便り「通信みずほ」での家族への参加案内が功をそうし毎回、数名の協力が得られるなど会議への取り組み姿勢が窺える。ホームに関係の深い薬剤師による「骨粗鬆症」や「点眼剤」についてのミニ講話では、自ら用意された手作り紙芝居で参加者に分かり易く説明したり、防災関連用品の説明に関係者に来てもらうなど、会議内容を検討し参加者からの活発な意見が運営に反映されている。	ホームリビングを会場とし、参加者が入居者の普段の様子を確認しながら状況を把握している。参加者が自ら資料を準備されるなど会議への理解が構築しており、本年度最終の会議では新年度に向け、取り入れたい課題などについて意見を収集し、次年度に反映されることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	行政は相談に対し細やかな対応があり、運営推進会議へのもほぼ毎回参加がっている。また、町職員の研修を受け入れることで、認知症への理解も深まっている。	本年度は、行政の指導によりホーム書類の改訂が行われ、利用料などについても分かり易く追記している。管理者は更新手続きや書類提出で行政を訪れた際には、質問に応じてもらいながら信頼関係を築き、町政にあたる職員の新人研修の受け入れ先として地域貢献に寄与している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の研修を実施しながら、職員への意識付けを行っている。	管理者は定期的な研修会ばかりでなく、日々のミーティングで新聞記事などから収集した拘束の事例をテーマに話し合いの機会を持つようにしている。入居者を福祉車両で受診する際、車椅子からの滑り落ち防止に胸当てで固定するようにしているが、この事が拘束に繋がるのではないかなど、常に議論しながら対応するように努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての研修を行いながら、日々の業務の中でも常に意識付けを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際に利用につながっているケースがないこともあり、制度の理解に繋がっていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不安があれば、家族が納得できるまで十分時間をかけながら契約等を行うようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議により多くの家族に参加していただくことで意見を反映させることが出来るようにしている。会議の中では家族が意見を出しやすい雰囲気を心がけている。	入居者が自ら意見や要望を言われることは少ないが、寄り添いのケアから思いを引き出し、出来る範囲で早めに対応するよう心がけている。職員は家族の面会時や推進会議で何でも言うてもらうよう声をかけ、年間行事として予定している家族会で食事を兼ね、入居者の生活ぶりを見てもらうことで安心してもらうよう工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	平成26年度より法人が変わったことで、これまでとは違ったシステムではあるが、統括部長を通じて、現場の職員の要望は代表者へと伝えられている。	体制の変更により新たな関係が生まれ、母体の統括部長が定期的にホームを訪れては、職員の意見を吸い上げ代表者へ声を挙げている。ホーム内は職員が自由に発言できる環境にあり、今回のホームの変化にもこれまでのチームワークが活かされ、入居者への変わらぬ支援で望んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人変更があったが、従来の就業環境を継続している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修への参加機会が減少してきている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宇城地区ブロックでの管理者の交流や職員の勉強会が定期的で開催され、サービスの質の向上につながっている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの開始にあたっては、ご家族からの情報収集に加え、居宅ケアマネの訪問等でご本人への理解を深めながら安心して暮らせるような関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族との会話の中から困りごとやご本人への家族の思い等を理解し、それに沿った支援を行い、家族が出来ることをお願いするなどして一方的な支援にならないよう心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人や家族、担当ケアマネと共に話し合いながら今必要としていることを見極め、段階的な支援が出来るよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日々の生活の中でご本人が興味のあることを見極め、その人に応じた支援をすることで、共同生活者としての意識を持っていただけるよう心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	行事時や普段の訪問時に生活の様子を伝えたり、情報を共有することで家族との信頼関係の構築に努めている。また、通信を通じて家族とのコミュニケーションを深める努力をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の方たちとの交流を行うことで訪問しやすい環境作りをしている。また、友知人の訪問があった際は、それを家族に報告することで、次の訪問につながる支援をしている。	ホームは隣接するデイサービスも一軒のお隣さんとして互を行き来し交流している。入居者は受診先で馴染みの人々と出会い、家族の希望で送迎リハビリに行かれる方には人との交流を目的の一つとして利用している。入居者は畑仕事や掃除、洗濯たたみなどこれまで培ってきた作業に関わり、洗濯物は名前を見て個別に分けられるなど本人の得意とされる支援の継続は日々の生活への張りとなっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共通の興味ある話題で会話が弾むよう、また気の合った利用者同士が交流を図れるよう、職員が取次ぎをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後もこれまでの関係を断ち切ることがないよう、家族や本人の希望があれば、いつでも相談・支援ができるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中での言動から本人の思いや希望を汲み取り、その意向に沿えるよう心がけている。自発的な要求が困難な場合は家族からの情報を基に本人が望まれているであろう支援をプランに活かせるよう努めている。	職員は入居者との普段の会話から思いを引き出し支援に繋いでいる。職員を入居者の担当制とし、状況報告や衣類・寝具などの不足等を家族に連絡して、同時にホームへの要望や入居者への思いを聞き取りプランに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	関係機関からの情報収集に努めるとともに利用者本人、家族との会話の中、あるいは友知人の訪問時の会話の中からこれまでの生活歴の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	申し送りや連絡ノートを活用しながら利用者の心身の状態、行動の変化を全員が共有できるように勤めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の支援の中でのきめ細かな観察から課題を探り、職員で解決に向けた検討を行いながら介護計画に反映させている。	ホームでの生活が長くなられた入居者に安定した日々を提供し、新しく入居された方が安心して過ごせる環境を整えながら個別プランを立案し、定期的な評価で見直し、現状に沿った内容としている。ホームの最高齢者である入居者に時には併設施設の介護浴槽を活用したり、教え子との面会時間を見守るなど継続した支援をプランに盛り込み、家族の意見や職員の気づきが反映されるよう心がけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日中、夜間の一人ひとりの言動や対応を記録することで心身の状態を把握し、課題解決に向けて職員は取り組んでいる。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設のデイサービスの協力をあおぐことで、必要と思われる支援に対しては柔軟に対応するようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域との交流の機会を増やしたり、行事への参加等を積極的に支援していくことで、変化のある暮らしを楽しむことが出来ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医とのつながりを断ち切ることなく、入居後も希望の病院で受診できるよう支援し、必要があれば専門医への紹介も行っている。	これまでのかかりつけ医や協力医など本人・家族の意向に沿った医療機関を支援し、共に受診対応を行っているが、健康状態を共有するために家族にも次回の受診日を伝え、できる限り同行を促している。職員はバイタルチェックに加え、日々の関わりの中で変化がないか、職員間で気づきを確認し合っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	協力医療機関の看護師は入居者一人ひとりの状態を把握しており、介護職への適切なアドバイスをしている。また、併設デイサービス看護師が定期的に状態把握をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には家族と共に主治医からの説明を受け、入院中も病院を訪問しながら、担当看護師等との情報交換を行い、必要時には主治医からの意見をもらうなどしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在まで看取りを行っていないが、新年度より協力医療機関との契約内容の見直しにより、今後みずほとして出来ることを職員全員で協議していくこととしている。	現在看取り支援は行っていないが、家族の望まれる「一日でも元気で長生きして欲しい」という要望に応え、日々の健康管理に十分配慮しケアに努めている。管理者は自分たちに出来るギリギリの支援を見極め、今後を検討していきたいと語っている。	今後は重度化・終末期支援に関する方向性を決定し、職員で共有を図ることや、ホームにできること、できないことについて家族とも話し合う事が必要と思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	運営推進会議の中で消防による実技講習会を実施し、急変時に対応できるよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	職員全員が避難方法を身につけられるよう定期的な訓練を行っているが、地域への声かけに至っていない。	総合訓練を含む年二回の火災避難訓練の実施や、推進会議で防災関連用品について業者より話を受けている他、会議の中で救急救命講習(AED・人工呼吸・心臓マッサージなど)を行い有事に備えている。訓練後、消防署から時間を甘く見ないことや、避難させる際は、居室の名札を持って逃げることで確認ができるなど指導を受け、次回に生かすよう共有が図られている。防災担当者は消防団や地元の方々の参加を得た訓練を企画したい意向である。	炊き出し訓練の実施を職員から出されており実現に期待したい。また、検討中の備蓄やコンセント、建物周りの確認を記録に残すことで意識付けにも繋がると思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの性格を理解したうえで、その人が不快にならないような言葉かけをしながら声の大きさや目線に配慮した対応をしている。	方言を交えながらも入居者への言葉かけは失礼にならないよう共有している。呼称については家族の確認を行い、苗字や名前にさん付けで対応している。職員の守秘義務については入職時や日頃のミーティングの中でも周知が図られている。明るい職員の声や対応のもと、入居者は安心した表情で過ごされている。	今後もあらたまった研修の機会に限らず、日常的に事例を通じた研修で意思統一を図り、変わらぬ入居者中心の支援が継続されていくことに期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その人のペースに合わせた声かけを行い、気持ちを萎縮させることがないよう配慮することで自己決定の支援につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その時々気分や体調に合わせてながらペースを大切に支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一緒に買い物に出掛け、自分で好きな服を選ぶ楽しみや買い物を楽しめるよう支援している。また、ご家族からの希望も汲み取りながらおしゃれを楽しんでもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	重度化に伴い、調理等が難しい状況なので、好物や懐かしい食べ物を提供し、それによって食べながら会話が弾むような時間作りを心がけている。	入居者の希望を取り入れながら作成される献立は家庭的であり、新鮮な地元の食材を中心に調理されている。明るく開放的なリビング食堂は、調理の音や匂いが食欲をそそり、配膳を待つ入居者を笑顔にしている。介助によってテーブル配置が検討され、職員と入居者が一緒に食事を摂る和やかな食事風景であった。	調理に携わる事は困難な方が多くなっているが、食材購入や新鮮な野菜を見ながらどんな調理や切り方がよいか？味見や評価をしてもらうなどできる食への関わりを支援いただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分摂取量を毎回チェックし、栄養状態の把握と脱水に注意している。また、水分摂取量が少ない利用者には家族と相談し、本人の好まれる乳酸飲料等で補うなどの工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その方の現有能力にあった方法で口腔ケアを実施しているが、口腔の清潔保持が難しい利用者があるのも現状。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	声かけや定時誘導等でその人に応じた支援をしている。排泄パターンによりパンツやパットを使い分けることで負担が軽減できるよう支援している。	排泄のパターンを把握し声かけや誘導を行っているが、常に同じという認識ではなく、その方のその日によって対応することを共有している。管理者は職員の観察力、接し方により入居時に失禁のあった方も減少している事例をあげている。夜間おむつを使用される方の定期確認では、排尿の量によってパットの大きさを使い分けるなど、常に状態に応じた対応を心がけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘に効果のある食材を多くとりいれている。また、排便チェック表で排便の状況を確認し必要があればデイ看護師の指示をあおぎ対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	その日の体調を確認しながら、また一人ひとりのADLに応じた入浴方法で気持ちよく入浴を楽しめる支援をしている。入浴拒否もみられない。	一人ひとりの体調や希望を確認しながら、気持ちよく安全な入浴を楽しめるよう、身体状況によっては二人介助で対応している。「入所時は拒否が強かった方も、職員の絶妙な声かけや誘導により現在が全員が気持ちよく入浴されているのはホームの特徴である」と、管理者は笑顔で語っていた。冬至に楽しんだゆず湯支援の様子は、記録写真として家族へも報告されている。	入居者の身体状況から今後は、二人介助でも困難な場合は、隣接デイサービスの特浴も利用しながら、湯に浸かれる入浴を支援していきたい意向である。入居者に喜んでもらえる取り組みに期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調に応じた休養を取り入れながら無理がないよう支援している。夜もしっかり睡眠がとれるよう、環境作りをしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬は必ず確認を行い、変更時には申し送り等で周知を促している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除や洗濯物を干したりたんだりなどの家事の声かけを積極的に行うことで、自分たちの役割を果たしていることを感じてもらったり、外出の機会を増やすことで楽しみ作りをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自宅への外出支援や温泉での外泊、家族を交えてのバスハイク等では安全確保のためにお互いが協力しあっている。	ホーム敷地内や近隣を散歩したり、地域青空市場や隣町に衣類購入に出かけるなど、希望を確認しながら外出を支援している。動物園への外出には現地集合で参加された家族や、温泉で正月を迎えられた方もおられる。また、「帰省したい」の要望に、綺麗な庭に帰ってくることで安心してもらえるよう、先ずは家族(県外)が草取りを済ませたり、近所の方に声をかけ立ち寄ってもらうなど温かな帰省支援が実現している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	重度化していることもあり、金銭管理はホーム管理となっているのが現状である。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	重度化しているが、職員は日常の会話の中から思いを汲み取り、それを通信で伝えることで大きな効果が得られている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、時節のわかる飾りつけ等で季節感を演出し、心地よく過ごせる工夫をしている。	田畑や山々を望める環境にあり入居者は、職員と一緒に見慣れた光景の中でゆったりとした時間を過ごしている。経年にあっても手入れが行き届いた空間に、職員のホームへの愛着も窺い知れる。廊下を歩く際、目を引く居室表札は、地元の福祉事業所に依頼して作成されたものであり手作りの良さが温かい。リビングに掲示されたご当地アイドル『くまモン』を取り入れた壁面は季節ごとに変わり、入居者や来訪者にも好評で和やかな雰囲気作りに一役かっている。	今後も散歩の際に摘んだ野の草花や、好評の掲示物により季節感漂う空間作りが継続されていくことに期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	思い思いにひとりで寛いだり、中の良い人同士で過ごせるよう、畳の間やソファ、椅子を配置している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時にはこれまでの生活と出来るだけ変わらない雰囲気を作るため、使い慣れた家具を持ち込んでもらい、不安の軽減に努めている。また写真やぬいぐるみ等で、自分の部屋らしさを演出するようにしている。	それぞれの担当職員は、衣替えや必要な品、本人が希望されている物品などについて家族へ連絡を行い、安心して過ごせる環境に努めている。馴染みの品(家具・寝具など)や家族の面会時に一緒に鑑賞できるようテレビを持ち込まれている方や、ハンガーに掛けられた丹前が季節を物語り、その方にとってのお気に入りの品であることが窺える。居室にはベッドが準備されているが、これまでの習慣や身体状況によっては、畳に布団での対応を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室やトイレ等はわかりやすく表示し、混乱を避けるられるよう工夫している。		